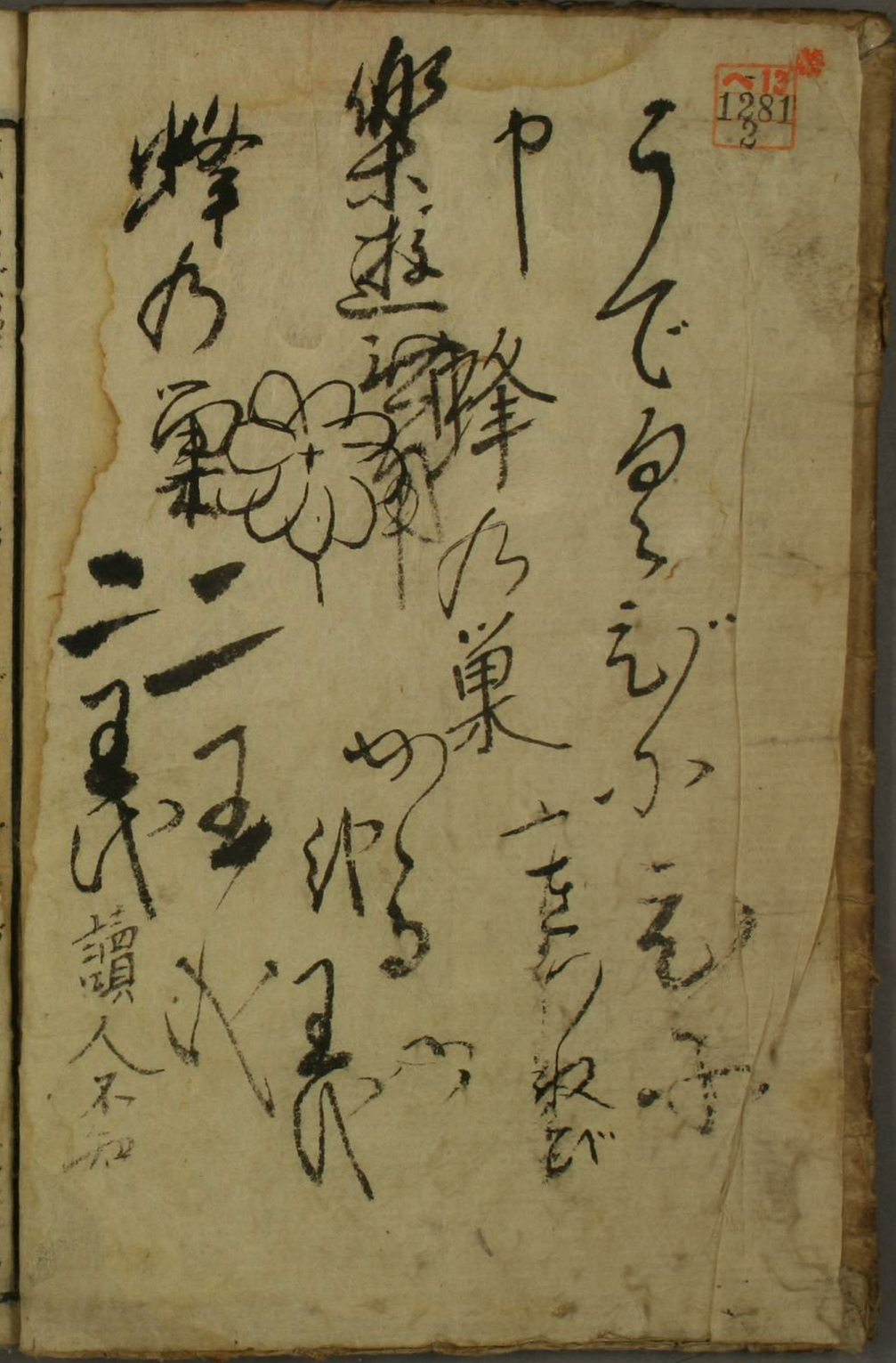
Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

1281
2
13

へ13
1281
2



本任
村田

今日ぞ一代一世の人乃花恍暉だるりふ粧扮ふべ冊の女房達侍女婢各そ
猗羅と飾ア美麗と竭し青侍若黨仕丁ふ到るまゝく悉く盛粧し
あるり代ゝゝゝく見へゝりゝりされバ今天下の美人と称する千代曇嬢の入
麝ふ見ぶさぞかうるしゝゝゝんと老若男女踵と繼ぐ姦君羊ア者者道ふ
充満ゝりゝ中麝の轅を廻して市原とゝゝ斤違塘ふ捩ゝ拶る眦ゝ北山の
方ふあゝゝ怨怒と閧の声と揚ゝゝ恰も天維も摧き地軸も折やゝ
緩ゝ緩ゝゝんどいゝゝゝ人ゝとゝゝも奈何と哭果ゝゝ処ふ北山家の執権玉谷中務
英義盧ふ立箭ふ蓑毛のごく紅ふ染昌披ふ乗りて馳参じ馬ようひらゝゝゝて
麝の前ふ平伏ゝゝも中院の定平卿ゝ勅宣ふ御使として討手の勢二千
搦手より押寄北山御所の四方を七重八重ふぞ取巻く公宗卿と生
俊季朝臣ふ官軍等取圍ゝ沢愚息真平驅敖ゝ拒ぎ戦ふその煙ふ

蕩さ世事ふるもくこハ誠とさ世事やうん御注進閑叅らるもぞぞとて渡一文字
搔断く其刀と吮ゆ突立霞復よ臥く死らりる千代襲媛を刎事ひとちく味と
一声叫び玉ひ〜ゑ侍女達駭く輿の裡と祝るふ伏沈く其侭絶入事しかれハ
あ〜りふ儚さ侍寂期やと動響法よ立るる輿嗣の勝臣早く御輿を
返せとて慧振ふ侍女達と引纏ひ忪憧青侍等を追立〻上と下へと混ひし
亦御舘へぞ返入り浩々〜処ふ貝鐘を鼓の音耳本ふ響き吶喊と哄と揚て武者
どもゑや中門迫乱入り政所の入道文衡公ゑ隠謀露見ゑるよ嗟乎
豈非天哉とく騒くる氣色もあく召ふ随て勅使定平朝臣の陣下ふ参じ犯
罪の糺明と待ぬ定平朝臣ハ中将殿と捕よと命事ふ殺千の兵殿中よ乱入て
天井塗籠打破翠簾儿帳と拉もと木草の陰ぞ残る隈ふく捜せども俊
李朝臣遂ふ見へざり々ぬハ定平朝臣先公宗卿と文衡入道殿と引て急ぎ

京へぞ皈ると事ふ此日いろゑる日ぞや元亨三年十月朔日北山殿代その繁昌一朝ふ滅亡
ふ〜ふきり爰ふ入道殿の下蔔ふ丁築作とゑる者官軍乃向々ゑと視て後
の山ふ逃奔岩の礎ふ躯ゆく日暮ゆく舘ふ皈りて〻ゑ只門前ふ跡痕果くく
ぞわゑるぶ爰ふまゑく俊李朝臣の下蔔ふ虚霧の箆又とゑる者是も彼ふ
ちゑさ白者ふく驚波軍よと祝るより一生懸命と逃さるぶ立噪々るあ〻ゑ
肝乞とも失ひく狼々滄そと此とゑふ嫌ひ素つ迷ふく行ひく豆ふ憑
奉る君ふ離つ迷ハ本國ふ下りもせゆとて余波とゑ〜住ふまつる舘もゑや
今霄限ゑ〻り偽や一宿せ迷やとゑふ後とも築地の崩より傴僂て入ふり用心
動静と祝るふ家の子老臣も何地ゑる落涙ゑ人一人も見えぞゑりて部遣
戸みか蹈破らるゑ庭ふハ紅葉散〻きく風の氣色も陰さふふ鴉
群ゑ哀々咬さと啼ゑる晩のりのさびーさ乞ふ下蔔の躯ふも慧ふ自ら俗さ

さね哀さ昼の間の騒まぐ玉椿の八千代を誑ひ幾多の人集ひ賑ひ々〻しも
夢の間おろく八荒涼つさまさびおや姫君八いとぎあ〻せ玉ふ〻んとゆくゆくさき御
局乃辺まぐ到ア簾の帽額の破間より内の母う代闕覗くるお兵どもが蹈堪
ん金色みぐさ笹の裡より讀棄みる短冊どものこてお散う〻こてお乱くる
中お衣引被て伏ヨ人御方ありり〻やと局の内お入く衣を褰て抜くれば
噫哀哉吁扁栽千代曩媛紅顔翠黛の色変ていりうやすきえてく
あくれ儚き御有様おぞあり〻り下臈笠涙と催さまあ〻傷しや婿君の没
落と内召澂と思つめくの御寂朔とん悼お尚あり〻り例稀ある因縁うお我そ
下臈の弱お是バ殉死とそぎれ責て八御亡骸とく奉ぎやとく篦又共そお
柩をとゝのくく来アね是八下さの葬お用る速まりの桶とく猿浅げあるその
あるお殮参せね御化粧貌八その時に婚姻の儀装束あり野辺の送アと差擡ひ

晩晩お過ぎまく早出り此夜間して墨汁をくるでき雲間お電光閃あくして
最冷じくりつもど是とありとく小松谷お到ア鬼ある香花院を祝く案内
もあく浴屍室の内お早入く灌湯の営ある〻奉るとく篦又八水と汲お出さり築徳
八姫の御髄を盥の裡お居奉〻〻何とあ〻ん力の凄く哀あも又ムやそく念佛
南々唱つ〻坐お慓のる節〻もとてあ是両さ〻ふりきそ神あり震ひ出つおどろく
ちく〻そもとてお〻ざるお猛然と迅雷氏の上おてくさめき屋の上瓦落々そと響て
ちん鳴神落〻ちと閃く電光お犯くくあ是バさも冷じき獣屍より抜ことまり
築作叫と喚て跑出る声も連お篦又々々と呼る篦又も息喘々とし〻て奔
来アいろおやいろおと問ふやたや火又お抓んとおセ〻ともど怪くるお篦又八もくれ
とヨんヒ〻と何条怖る事あ〻ん吾その火又抜うる処を井のりとおて蹈殺しね
といんお実ちく〻ばとくばくぶんとて諸共井のりとお到ア此処ぞとんとてるお

一隻の墓蹈摧きとく半ハ死せぞ腹とうごめき眼とるめきやうり箆又さくさく此
墓電光ふ孩く飛つきしが火又と狂しめのあゝやと打笑ふ藥作らくふさい
吾も又火又とえしゝハ此寺の飼家狸ゞ雷の音ふ驚て屋の上と飛しゝあゝ
穴おろゝやと互ふ腰をとゝげ方ふ笑々るぞ愚されて形の如く御湯ひうを手ら
せ化人場ふぞ送て到る時しも野寺の鐘の声殷々とこく幽ふ鳥辺山の茶昆の
煙斤々と立のゞて雨も頻ふ遠近の東西ちゝね闇路ふく凄るふなぐさ伏しゝ野め
尚艸ちゞく露志げき虫の声そうをとぐていとゞ哀常と催ふるやよ此御佛
ゞど哀ふ痛しきゝあるさぞ日こそあゝんふ嫁入の日ふ二八の花を余彼とゝ
益々の風ふ誘を如ふ哀を命のちくあゝべ代もせゆくとあゝぞよ富貴の侍弱の
終おゞくくこゞ心ふ擔ひゆくも閨縁あゝわゞど詰合つ裏所も間近くゆく
前ふ蕪そうる茅草の中ふ白きその見ゆるゞ亡者の徐徘々る姿ふ彷彿くり

其さゑ白き単衣を被ゝ額烏帽ゆうの物と載き此方と搗てやうひそと言
ゞばもハ亡灵よと箆又ハ驀地ふありて迯生る藥作ゞ怪ばとて揮ゞもひ
ゆり棄息をえりふ齊く跑出ゞり伴の者ハ尚ゆうひくと嗚ゝ仆ら後
を襲来ゞ既ふ間近くあり待と詞をとゞけしゞあゝやと呼び大地ふ百と打坐て
領首と縮め一塊とあり方ふりうの者笑ゝく云我此姿ふハ譯あり是ハ縕袍の
方術ゆく絶て死人の来ぬ時ハうゞゝり亡者の形しゝく京の方と眺ゝゆうひくと
三遍唱つ搗くさゑ沢あるとくくられば極く亡者の来つる支妙ゆうゆうひくと
しふハ秘密の咒ありと詰るさハ祉ゝどあゝゝ肝と冷せしゝぞとて粥魅ゆうひ地
あゝ軈ゝ一串の青銭を與ゝ無止事御佛ふく在バ揮と共ふ焼てんといふ揮
と共ふ焼ふハ火下の隙も費ゞべ今一串倍ゝ給くようとしふぞ抜ゆうゝ二串の前
銭とふゝ揮沢授々て何國ゆぐも心ハ同ゞしゝや敬ねとて竟ふりとき路ゝゆう

衣ゝりこゝく編袍ハ件の柩と咎て喪家の内ふ入先双前より係在る一筒の柩ハ主を
發ゝく一死人と出せ〜ふこれハ老ゝる人の年来病養ゝると犯ゝく骨のゝ高く
皮肉陷て瘦髐て股竹木の如ゝく涕直ゝる代推撓てあゝると拯土の裡ふ伏
ふき〜てせゝ上ふ一枚の蒿菰とうけ柩を碎ゝく新と色鑣ゝく火をぞ下〜ゝり又
一筒の柩と發〜ふ年のこゝ紙ハ破爪ぐゝるもと見ゆる女の生ゝしき尸骸ゝの是
ハ普通ふハ家ゝ人の處女ゝのどふゝく又母乃寵愛最浦ゝ〜ざりしと見ゝ〜ゝやゞて
嫁の設ふやせ振乃狭の白ゝ垢を被せゝり柩ふ享朴と用ひゝれハ勞症ふゝく
物故と知ゝ〜ゝ色ねさゝく形のでゝく火と下〜ゝく又一筒の柩代發〜ゞ是ハ腫氣
ある尸骸の柩ふ満ゝると強ゝく四肢屈曲て殮ゝるゝるとハ頓ふハ出ざゝり〜と
とゝ〜して出ず ふゞ慙やゝふ是異ある産ふ難ゝてあゝ色ゝくも悉ゝる婦
とゝそ見ゝ〜ゝく牙と齒眼天ゞゝ肝腹ゝ〜ゝやゝふ膊ゝく鼓と抱ゝるゞ屎尿

膿血と流〜〜臭気臭と掩ふふ絶ゝ色ハ灌湯の者ゞゝ不潔を厭ゝく疎ふ
ゝ〜虜もふゝ〜色もきゝるゝと編袍情あゝるものふゝく經草衣と被と阿陀仏代
頭ゝゝけ念珠と拳ふ約〜ゝ〜ゝく香とゝる色回向と色てにもきねゝゝ代揺嬢ふゞ
ゝらゝと直ふ姫の柩ハ拯土の裡ふ居ゝく別ふ薪と立架既ふ火ゞゞ焼ゝる
嗟乎悲哉ゝ〜も由々ゝしゝき千代曩媛一時東仙の風ふ誘ゝ北茂乃烟と
ゝりゝく美人ゝゝちまち黄土とゝ〜ゝんとゝ偖火冉々ふ傳ゝ煽々と燃ゝる所ふ
不審や香い殿香郁馥とし芬々と編袍ゞ鼻を穿ゝく宛も牛頭旃柏の薫
ゞ如ゝくゝゝこゝ訝と頻ふ鼻深ゝ〜ゝもゞゝ色て搜ゝふ代柩とゝ色ゝゝ〜ねゝさゝて八
貴人の尸骸ふやゝさゝもゝそと思ゝ〜輕ゝき葬ゝゝりゝゝゝゝん公ふ得ゞゝと思ゝ
薪と拂ゝけ火の中ゝより柩と扶ゞ〜蓋推ひゝきゝく祝ゝふ正ふ是ハ今脇
ゝ色ゝゝ〜青蓮の御眸更ふ閉ゝく皇華ゝり高眉匂やゝふ玄鬢の端ゝり

幽に見ゆる貴戚御顔容はそおてる太液の芙蓉に似たり五つ衣に退紅ある
緋の袴踏らしミさも推き御粧巫女宿の花黄昏羅綺にさも堪ざる御容
ありけるを縕袍むくるへ見て限りなく呆果しが抑も此天人の定業にくさて此土へ
天降ませる歟と見るれバ死せる御膚の白く碼碯の吉祥天もかくやとぞおもはれ
思ひて焼きつる薫衣の香すらねに今乃かり煙とちりまて惝肝消心ほて
恍惚とぞありにゝり科る日数経て病し入ませるも不圖ものに驚き息迫て
て死せるかのおんうきしが蘇生するもあるうも計がたし若やと思ひ火の辺に臨て
膚を温めしたるに順環をるよしとさへくて冷たる四肢冉々に温を覚うとら天
の資ありと勇て一粒の醒藥を口に灌ければ千代曩媛定業天然いまださ
竭ず坐らん一口の胃氣を唾之し良頃刻して双眼を開らいて四下を視ままに
大の漢子比面垢て鬚髯々と頬亀遅しく怖しき氣なるが傍に近く居

るり目前に黒烟うづまき舁て火焔ものめく其中に人の手足燃て臭氣
鼻に觸て或腥く或臓く穢しき変りよとえる惣て是油煙に壊て黒ずみ
塗たるごとく光ととめぬ小屋の内なれバさらぬだにもいまはしき地獄なりけんとも
無るべく只惆まよひて坐を縕袍にくと打喚けさらそ驚き給ふらめと
鳥辺山の葬所なり御身死て到らせ給ふ一塊の炭とましてんハあまりに痛
しく御膚を温めまゐらせて勞て参せる我秘方の醒藥とかく御進せん
とぞべらそ甦り給へるまさべその醒藥ハ御身の命の根なり吾ハ是命の親そや其酬
にハ妹背の縁しの契てよまゐらせも目清く開せ給ハバ御膚津液いま一角のらん
くしさよなど虚露にたるむきいて千代曩媛いよく駭きもく呆さぎ
先ハ妹背を囲む抔ありとく白骨の殮る髑に水を湛て火下に湯わかさぞ
飢させ給へらめと夜半の儲の破子を開きやがて勸る爲倖に何とせん汚ハ

千代の曙
壇島辺
岡の表所
ふ戸る

しゃ渠ぶ古ゐく紙アとる其薬とも服しるるこ思へばいとゞ苦しくこゝ眩こ
烟ゐ煙び御ゑも戇ゐ立遂せ玉ひ外の面ゐ奔出んとし丑人ゐ縕袍襪〻當こ
閨てゝ〻鐵の罹と四方ゐ張ふぶ竜の弓鼎の魚乃出ゐんうくもあゝ〻もし
ろ擒とゐ也獲物ぞやいざ〻諸玉〻ゝう又拒ともいづ也の道ゐう脱らぐきいるやく
と迫アり〻ゝ云ゑ礼ゐり我と誰とろ思〻ゝ橋本中將俊季ゐ朝臣とら〻ゝねゐるゐのそ
聊示ゐせそと吃驚べさてゝ千代曩嬢ゐ〻坐うとて忽ち三屠ゐ平伏て兎角
の詞もゐるしゐ又序破と起上り面色も変アゐ〻無端や今ハ何とろ色べき
下官ハ御鈸ゐ仕へ〻阿修羅丸ゐる也ゐ果ゐくゆへ今ハ生邑震平祓行とゐの
名をけゝ〻此ゐ辺山ゐ世の形勢狐窺くゆゐ亡人幾ゐ〻り貌ゐろけ倩ゑ乃
学ゐゐを観〻〻稚ときよりの前非と悔て一時佛の道ゐ入朝暮会併三
昧ゐくゐつるゐ不覚主君の姫君ゐ窓暮ゐ〻つこハ兎ゐも角ても惡ゐ

ゐく武夫の乃ゐ是ゐ〻りゐり過て改るゐ勇ゐ〻と笑ハ笑く今又素の惡ゐゐ
翻アと罪も報も天ゐ仰ぐ人ハ五十のゐ〻也ゐ生涯を心のゐ〻ゐ蓋動んゐく
ゐゐ佛乃死ゐ〻〻外乃ゐ入畢ぬ今より千人の頸を斬く魔軍ゐ手向邪
法成就ゐ〻てんとく着々掾刀をもろ執件の孕婦ゐ腰を断裂く死胎の
戸狐嚏ゐ入前机のうゐ饌へ何ゆゑん念じるぞ怕〻ゐども惡ゐりゐ也ハ
生邑韋都那の神を祭ゐとゝゐ姫ハ御祝も泪も流ゐくゐ也く夢の浮橋ゐき
沈〻〻淵瀬を手ゐどりゐ〻ふゐく〻ゐ夢と醒〻つ也ゐ〻ゐ命何ゐ〻せん
殺さハ早く殺せ〻〻君ゐる者を辱〻しむやゐ也已ハ鬼ゐ蛇ゐ畜生ゐと声も
も也く欲セ玉ハ出邑哈々と打笑ひ吾今より州々ゐ横行〻ゐまゐゐ世狐徑
ゐ〻とゐゐふ爭ゐ二人の婦女ゐ惑んゐゐど死ゐくゐ〻ゐまゐさんとて着々
やゐて炎ハこゐる燻炷を撮く姫の目前ゐ也つけ片ゐゐ〻ゐ情据と撃儻惡を

あさバ飽まぐ硬うまそ吾元来焼をあく奴と汚くまと活身を甲くハ今が始う
面よりや焼ん腰よりや焼さん臀がよろらんと不知よく関更此者辺山あくハ
魁るもべ戻さべーて打殺さハ習あるハ公あれゞぞ魁させぬ御方今ハ蔵人
あくく呼声を渡る舟人の拉を断る身あるとバ主従夫婦とありく時と待こそ
最上の計あゝぞや昔王香焼殺さんやいろあやいろあと且さろまと且ひくさ
ちゆふ哀哉千代曩媛肝公も御身ふ副ぞ只鬼と一ツ車ふ載く巫の三峡
ふ椿さらんもこまとふハ過じと危ろる節こそあるとハ門ロを剥そと敲く者あり
此者ハ是別人ふあらぞ玉谷真平英忠あり官軍北山御所を圍し映男を
揮く一方と斬抽主君俊季朝臣と殺く此者辺山迫脱ぶ官軍今後を
襲ふ夏急なりとふ藍塔の裡ふ棄〜柩のあると祝く幸ふ俊季と潜せ
参せ亡者ふりく色て此香所ふ躾ま官軍とやりるさんと思維きて火葬ぞ

憑ありと連ふ外面を敲くぞや吾る内ふ出邑此声と関ふ是玉谷あとば
急ぎ翔き姫の御ふ袖ととりく銜せ縛ふ て柩ふ推入蓋のろ狐千文字ふ
ろやくく人の右とあさんが公ふくさふ燒炷蒿蒭ふつゝそやゞく烘ろ彦さ
講と色已が面ハ幅巾と被ゞく門の戸と開声ハかとめそ今ふ来らめとふ素
つ虚知ぬ白ハふく手反だり立左ーが聽く蠶ふ跑つ清水坂ふ到る夏ふ雑
鎧被る一擁の軍卒績明を照陸續として来て蔵人をくるやと眼と賦て
問出邑根ゞくさまバその蔵人ハ俊季千代曩媛とゑんふや麥所乃内ふ
躾ありわと告るふぞ軍兵どもさべ郷ゞ乃せよゞそぎとて烏辺山ふぞ駈
けさぬ出邑ハ彼所ありと告て其狐ハ何岡ともるく公ふり官平まそ
麥所の四方と取圍く漏る餘すふと閲て雄剣の声と揚ぬ此時玉谷ハ俊季
朝臣ふ抱ふ入く麥所の内ふ出ふ其狐ハ傍の一叢芒の中ふ覗ゆるが事

あらまはしと太刀脳門に差劈し咄と嘆て突入つ蛛手輪違に斬く廻る四
角八方に薙立るまゝ官卒縱横に捲ちつゝ是一支にも怯る不絡右往左往
逃散り英忠尚も蒐散さんと北を遂て二三丁ゞ程進し処に丞の方
あらて黒煙天を掩ひ煙火空に飛ちりて火の光眼〳〵見へ英忠に
駭きとつく回〳〵騁つゝ丞所にもや火熾に十方に蔓て烟四方に塞て
入乃ち弁へそなうつる玉谷に君を焼参せ命活ても何ゝせんとうぞめく
焔の中に躍て入ぬ忠義の竈鐵石に似とく雖なく一箇の樞を掻抱猛火の
中を脱て三段ぞり黄〳〵烟と飲息迫て閉絶〳〵てぞ仆ぬ（此時還を被て是に其身に焼されぞの祇衛の火氣まとりねるとや）
（編者此後瘡病）小くして岸破と起上るに〳〵や丞所に灰煙とぞうりねあ〳〵嬉や
既に危きの命を〳〵〳〵も君に救ぬと樞の蓋を推開に是いろん俊季朝
臣にあ〳〵ぜて千代曩媛坐まゝね玉谷更に其蓋と會ぞとハいぜてと問

も忙〳〵く其事をとり縛とくに苦るも胸元く出ぜ詮る所こゝに出色震天
所者ゝり和殿門にあく行違玉ひそと列より英忠這奴杜撰んと二枝三枝
遂んとこいあく程もさうと前と後を顧るに逞あ〳〵俊季朝臣ハと
祝まべそ丞所ハ形もあつうり玉谷地端を踏て薪盡る焔を眺し緊
陣を破て万死を出く一生に逢ぞ御躬を忽ち一丁の烟の下に立あうせうと
奮躍て火の中に身を抛んとと姫ハ周章惟ぞめ吾儀こそ共に炭とぞ成る
ゞ〳〵と〳〵〳〵る状を振るのつあうり〳〵ふぞ理とうるに直乎ハ死ハ且まゝて遂
や此の両ゞ〳〵獲るとかく起るの順と思索〳〵俊季朝臣心早く坐ば
蕩きセ玉人も計らまぞ是とり便宜の地に潜く時を待せよ〳〵〳〵英忠うく
てあるうハ御ゝ此ゝ〳〵ぞ此ゝ〳〵ぞ〳〵せど姫君ハ十年所待〳〵曾若の御所
の長押も越ぞてゝるまぞ〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵〳〵ぞ〳〵ぞ〳〵〳〵ぞ〳〵〳〵ぞ〳〵〳〵夫婦樞と伴つ

さて一言の詞もなくあくまさきたの接ぎさとと哭せまバ真平も眼より血を
濺ぎ歯を切だりうり時ハ後を起こ走ー官卒四人むりり生捕んと覩ひ寄
組付きと英忠引独して前なる官卒の勇面こ一撲ハ薙倒せバ烏球
頸歪捲くも斃死こりゝる右なる官卒と機会をうつく踢こりこ逐のどく
踊く傍の樞乃中ハ推入る其まゝ執て火中ハうと抛ー火發と炎ア火葬と
なりて失うね左手なる官座ハ上帯低でこ扶十丈むりそこさなハ玄りう遥
の梢ハ揚ア領首枝ハかゝアく四支とあちこ撩挑と旋ー八更ハ鞦韆の如く縊く
とそハ死て多り後なる官卒ハ吾と揮ひ蹴ハありこ逃つる恰六尺余の石佛を
もり執礫として打るが壁ハ打ち微塵とうるく失ぬり此時黎明ハ向んとそ
真平一足もたやく京都のうちと脱んといざまくとて誘へど恒こう恋しき鳥
辺山是ハ稀なる無常ハく歎沉せ玉ひる千代曩媛を掻負進セ北陸道へ

ぞ落行ゝり

三　千代曩媛佛原善知識　玉谷眞平礪並山隱德

さる程ハ北山の公宗卿入道文衡公ハ終ハ刑戮せらるゝ尚も俊季千代曩媛
の行方知ぬとそその貪議嚴ハくるこ麦ハ玉谷真平英左ハ六十六部の
姿典を納る面國の修行者ハ鴉を饗ー千代曩媛とゞ笛の裡ハ潛せ参せ
見ハ人目を掩ふ為且ハ路次の轎子とて大きやうなる笛なれど其形六尺有
余なるまゝ背ハ負ぐ杖にめく征打ゝ立る体真の捨身修行とぞ
祝くよる越中の國の住人名越左郎時兼ハ北山殿ハ憑参せつる
極く俊季山方へ落ぬんと志ー跳ぬるけさ旅ハとや畫ハ麻乃中
青塚のゆげよりもちまさひ夜ハ山の奥幽なる谷の叢祠を宿として知ぬ里

一代男後物語
卷之一
十九

十人組

足ぬ浦山より颯へべ凍餒の困しを免ぐ雪の飛凍る水とひさびくいろうへ沢
凌く老うの艱苦詞ゑのぐぐし人ゑ人知ぐ邑ぐ為ゑ夜のぐ乃を急ぎ星
を簪ゑ月を曳くゆく程ゑ日数経て漸く加賀の國ゑ入ゑぬ千代曩媛
昼ハ笛の裡ゑ屈しゑくべ夜ハもさもゑ〜ハぬ草難ゑ力杖ひくひく歩ゑ
夜ゑ遠び篠系の野路ゑさ〜ゑ邑ぐ此處ハ仏ぐ原ゑも喚く只沓花ゑる瞻系
ゑく野守ぐ芦芒ゑ火をさ〜野火一面ゑ乱ぐ節ゑ〜風烈〜く荒ゑ
往来の巷ゑも吹出ぐりとれとあ〜ぐとして瀾ぐくゑ芽芒の燃る中ゑ悩
臥ゑる者ゑりく後行者助けくたぐと呻吟ゑる火既ゑ四方ゑ迫ゑ其躬
焔ゑつゑ最危ゑと千代曩媛中ゑ助ゑと宣へべ真平火の中ゑ
躍ゑ入辛じて扶出せ〜ゑど元ゑり病さ〜だひく腰膝も起ざゑ
ゑの半身焦爛く苦ぐぬ若悴ゑり真平肩ゑ扯ゑけ衛半反だゑり

も退ゑた残喘の下ゑゑりゑ邑ハ千代曩媛ハ忙〜く漸ゑる野河の水
を掌ゑ掬ゑりくゆさ嗽んとゑるその間ゑゑハたゑ掌沢漏ぬ幾回も
此邑ゑゑ事急ゑ迫ゑゑ邑ハ御ゑゑ水を御ゑく口博ゑの者ゑ与ハ知ゑく
此吻とゑゑく下官鳥辺山ゑ送ゑ奉〜ゑゑ邑て〜〜せ玉ハ穴難儀や
とく尚言ゑげゑるぐ言ももく〜色も変ゑ真平ゑ財く旅の用脚進らと
ゑ〜とゑひて只管行李を指し姫君を伏拝々つ〜息ゑて終ゑ儚ゑりゑゑり姫
ハ驚ゑ世ゑひ此者ハ丁の簗作とゑる下臈ゑく譜代恩顧の者ゑもゑ〜ゑく〜ゑ五ゑを
辺山ゑ送邑ゑゑてもさくも忠義の者ゑくゑりつるゑ使ゑさ主従のとゑゑゑゑるゑゑ
と泪袂を絞ゑゑゑひゑる真平もゑゑく悼〜指し〜ゑ行李を伏ゑゑ凄ゑ砕金一斤ゑゑ
一斤ハ十六両　故園ゑハ妻や子もゑゑ捜求て與ゑゑと件の金ハ懐裏ゑ攸く別ゑ自己の
金板金ゑく十六両と簗作ゑ艦ゑ漆ゑ昱奈何とゑゑとハ真平ゑ来剛亜の

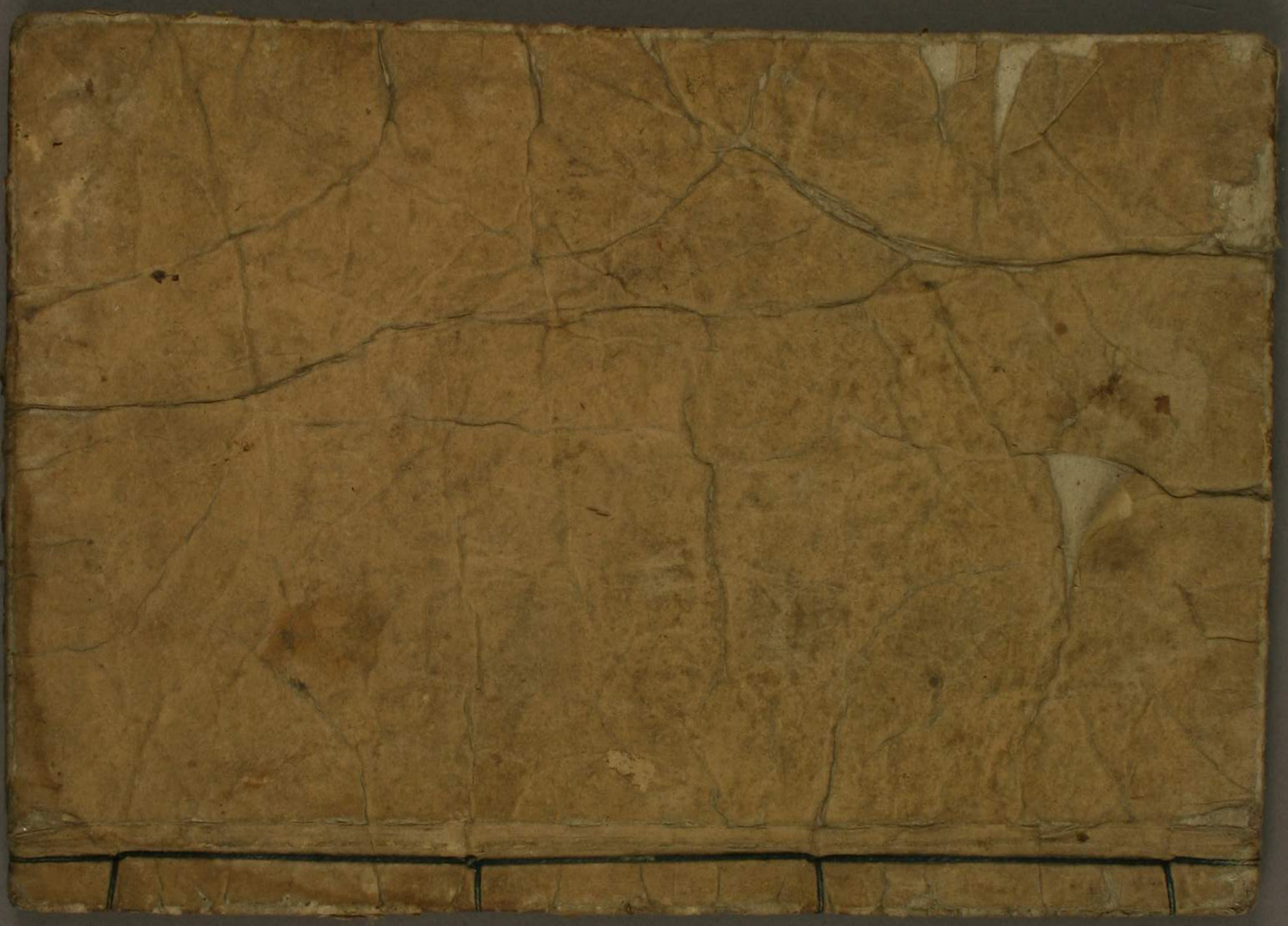
さるれば漫々死人の金と掠ーるおどいそ[illegible]が為る後の證る此れ[illegible]ーて傍ある
石の地蔵の下ふ堀瘞ねあそ[illegible]望郷の愁身ふるぐ〳〵仏ご示の朝露ふさ〳〵く
僂き回向ぞ[illegible]ぬかくて山越ふ越中の国へ渺〳〵と礪波山る分入けと
行末ふそき針乃爪經く小篠ふ[illegible]ける[illegible]ぐ〳〵もさだうあ〳〵ぞ山又山る踏ま
よ〳〵藤と蔦葛と縁ア〳〵或峰る躋ア或澗る下ー水又ふと渺ーこる終ふ道縁て
狐兎あどのかよふ[illegible]ぐさ經さ[illegible]ぶ[illegible]ぞ日既る没ーぬ月ば山の
端る出ー〳〵ど雲かくりゆく〳〵べき前も[illegible]ぐ〳〵程る山河の流瀧浪の
響浩々と[illegible]ぐ松柏木高く樹々の枝と吹る[illegible]梢と傳ふ猿の音狼の山
ふ呼ぶ声の〳〵色て寂ふ[illegible]人跡絶る深山幽谷の光景ある真平ハ笑る鞋と踏んぞ
鉦打鳴ーる[illegible]る処るいづちよりる修行者々と喚をのあり怪ー何者ある[illegible]
と錫杖と住め木の間を漏る月の光ふ祝〳〵あれば風る動く荻薄の茂

さる中ふ年壮き男と女ぞ深く土の中ふ埋く肩より上と出ーつる
あり近く寄る〳〵見ば妙る美男美女ある[illegible]ご首と首の間ぞ一間あ[illegible]隔く面と
面を対合せ[illegible]ぬ苦ーき曽ふ氣を虻の如くふ吐る哀修行者釈門の慈悲代
り〳〵我々夫婦のそのを助け給ふ[illegible]莫大の洪恩ある[illegible]ば真平ぞ[illegible]
是代看て你等儻囹禁をも犯せる徒ふ[illegible]る刑罰とも受る者ある[illegible]ば
漫ふ我私ふ救ひ[illegible]ぞ[illegible]ーる夫婦の者潸然と泪と流ーて曽ふ[illegible]
あ[illegible]ぞ事故とも清〳〵ふ[illegible]ぐ絶ぐ[illegible]ふ水一ツ給ふ[illegible]ー千代曩後ふ悶然と愁
を催ー〳〵笛の裡より起出ひ[illegible]ふ哀弥増と閉ふも思ひ[illegible]ー〳〵
弟のありそ〳〵人の命と助ー〳〵人ーる[illegible]ふ[illegible]ぐる[illegible]ぐる[illegible]
得させざると宣ーふぞ真平畏ア[illegible]と軈て戒刀と合て[illegible]の土と穿
ー竟る土中ようぞ扶出ーてくれば夫婦の者ハ余ア[illegible]喜ーさふ詞る[illegible]

高恩の忘らやとく只管地ふ平伏し三拜九拜おしふる姫君ハ謝とるゝ
遠ぞ夏の由とも関まぢきぞやとや疾く去ねと宣べば夫婦ハ欣喜雀躍
亮ぶ如くふ奔去る此時真間のうれいじく此涼山と出るさと思ハ人人
處ふ一朶の彩雲頭上ふ現ず光明赫奕として乃ゝと照せり姫雲氣を仰ぎ
我一念生と好ときふ景星慶雲常ふ前ふ現ず一念殺と好めば妖星厉氣ゝか
後ふ隨ふ生殺の機一念の起処ふしゝく禍福曼ふ従へとゝや宣ふふ此雲氣
くふ従つ凡一里だゝり山と下ふ火の明凡くゆるふ雲氣ハ再そとして消さりね
誠ふ是不思議ゝる次第ゝるもくだ上中ふ結癖とゝし者ども何等ゝるゝ
是暁ゝぐとゝくども千代曩媛ふ結令の恩と報じ莫大の忠節を図ゝるゝ
図ふ後ふ巻々そふ到ゝく矣へ知ゝゝとぬ

千代曩媛物語巻之壹畢

本兵

本兵

初稿　村田　定房
初稿　文化元年　定房
文化十五年　定房
初稿　文化十五年　定房
讀人不知